

介護老人保健施設利用高齢者の「待つこと」に対する認識

東尾祐子^{1*}，沼本教子²，井下訓見^{1*}
野口孝子^{1*}，南かつ子^{1*}，坂根朋子^{1*}

^{1*}神戸社会保険介護老人保健施設，²神戸市看護大学

キーワード：介護老人保健施設，高齢者，待つ，認識

Cognition about “Waiting” of the Elderly at Geriatric Health Services Facility

Yuko HIGASHIO^{1*}，Kyoko NUMOTO²，Kunimi INOSHITA^{1*}
Takako NOGUCHI^{1*}，Katsuko MINAMI^{1*}，Tomoko SAKANE^{1*}

^{1*}Kobe Shikaihoken Geriatric Health Services Facility，²Kobe City College of Nursing

Key words：geriatric health services facility，elderly，waiting，cognition

I. はじめに

介護老人保健施設利用者の日常生活は，朝・昼・夕の食事時間を軸にして，午前・午後に予定される週2回の入浴，毎日午後のレクリエーションやリハビリによって特徴づけられる。その合間の時間は朝夕の洗面・更衣や排泄などの時間，気のあった人との語り，家族との交流などに使われている。A老人保健施設（以下，老健）では利用者のこれらの日常の過ごし方を観察する中で，サービスステーション前やエレベーター前のホールなど，パブリックスペースに食事時間の30分～1時間前から利用者が「集い」「待つ」という状況がよく見られた。これは食堂が施設内の1カ所にしかなく，エレベーターで階を移動しなければならないという理由があるためである。また食事時間が終了すると食堂に隣接したトイレ前に多くの利用者が並んで「待つ」という状況も見られる。これらの「待っている」利用者のそばをスタッフは「気がかり」を持ちながら忙しく走りまわってケアを行っている状況がある。「待つ」という行為の中には様々な意味（鷲田，2006）があると思われるが，利用者が集いながら「待ち」続けることによって得られるものもあると考えられる。一方，必要なケアを待たせてしまっている状況が推測され，倫理的課題も内包している可能性がある。

本研究の目的は，老健で生活する利用者が様々な場面でみせる「集い・待つ」という行為に着目して，どのような意味があるのかを明らかにし，必要なケア課題を明確にすることである。限られたマンパワーの中で施設で生活する利用者が何らかの気兼ねや焦燥の中で「待つ」という状況を過ごしているとすれば，その背景や理由を明らかにして何らかの解決策を見出す必要がある。一方で「待っている」ように見える現象の中に，利用者同士が交流を求め「集い」「待っている」のであればそのニーズに応えるケアの場を創出していく必要がある。いずれにしても利用者が持っている自由で豊かな時間が，意味ある時間となるようにケアに生かしていく必要がある。

本研究の結果は利用者の視点から「集い・待つ」という現象の意味を探ることによってケアニーズを明らかにし，今後の老健のケアの質の向上に寄与することができると考えた。

II. 研究方法

1. 研究協力者

研究協力者はA老健でケアサービスを受けながら生活するインタビューに応じるのが可能な施設利用者とした。

2. データ収集方法

- 1) 研究期間：平成20年9月～平成21年3月
- 2) インタビュー：インタビューガイドに沿って半構成的インタビューを行なった。

(1) インタビュー内容の概要

- ①エレベーター前やサービスステーション前に「集い・待つ」理由
- ②「待っている」時間に何を感じ、どのように過ごしているのか
- ③「待つ」という行動に対してスタッフにどのような関わってもらいたいのか（ニーズの把握）

(2) インタビューの場所

研究協力者が自由に語れ、プライバシーが確保できる協力者の希望する場所で行なった。

(3) インタビューの時間

研究協力者の疲労を考慮して、1回30分程度を目安として1人1～2回行なった。

3) データの産出

インタビュー内容を協力者の承諾を得たうえでICレコーダーに録音し、インタビュー終了後、逐語録化した。

3. データの分析方法

協力者ごとの逐語録を繰り返し精読し「集い・待っている」事・時に対する認識内容と、ケアニーズを示していると思われる内容を抽出し、コード化した。全コードについて類似性と差異性に着目して比較検討

し、類似する内容を持つものをサブカテゴリーとして集めた。サブカテゴリー間で類似性と差異性を比較検討し、類似する内容を持つものをカテゴリーとして集めた。

4. 倫理的配慮

本研究は神戸市看護大学倫理委員会の承認を得て実施した。協力者に対してインタビューの実施前に研究の趣旨、自由意思での参加、途中辞退の自由が可能であること、研究参加の如何や途中辞退での不利益を生じないことの保証について文書と口頭で説明し、研究参加の可否を尋ね文書で同意を得た。本研究は、研究者が働く施設をフィールドにしているため、研究の同意を得る過程、およびインタビューは共同研究メンバーが所属するフロアを交替して、日常ケアを担当しないメンバーが行い、威圧をかけない配慮をおこなった。また、研究協力の同意が得られた場合でも、軽度認知症をもっている高齢者が含まれる可能性があるため、協力者全員の家族への説明を行い、同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. 研究協力者の概要

協力者の概要は表1に示すとおりである。年齢は74歳～95歳で平均年齢は84.3歳であった。性別は男性3名、女性12名、要介護度は要支援1～要介護4であった。

表1 研究協力者の概要

協力者	性	年齢	要介護度	入所期間(月)	日中の過ごし方
A	女	70代	3	3	車椅子自操, 行事への参加積極的
B	男	70代	2	2	車椅子自操, 居室内
C	女	90代	1	3	移動は歩行器, 居室内
D	女	80代	2	15	車椅子自操, 居室内
E	女	80代	4	5	車椅子自操, ベッド上
F	女	90代	1	22	車椅子自操, 居室内, 行事への参加積極的
G	女	70代	4	3	介助で車椅子移動, ベッド上
H	女	90代	要支援 1	毎月14日間ショートステイ	移動は手押し車, 居室内
I	男	80代	1	12	車椅子自操, 居室内
J	女	80代	1	4	杖歩行, 行事への参加積極的
K	女	90代	1	10	車椅子自操, 居室内
L	女	80代	4	3	移動は歩行器, ベッド上
M	女	80代	3	12	車椅子自操, 行事への参加積極的
N	女	70代	3	29	車椅子自操, 行事への参加積極的
O	男	90代	3	32	車椅子自操, 居室内

2. 利用者の「待つこと」に対する認識

協力者15名にインタビューを行い、語られた内容を分析した結果、表2に示すとおり【待つことは当然】【待つことは仕方ない】【不満】【しんどい】【気遣い・感謝】【期待・楽しみ】【自分で待ち時間を調整する】の7つのカテゴリが見出された。

表2 介護老人保健施設における利用者の「待つこと」に対する認識

カテゴリ	サブカテゴリ
待つことは当然	順番を待つのは当たり前 育った時代・教育の影響 慣れた 皆と一緒に安心
待つことは仕方ない	諦め 苛立ち 他者との比較で待つ事を納得
不満	待たされ方の不満 待っている状況への不満 施設のシステム 職員の態度・雰囲気に対する不満
しんどい	並んで待っているのはしんどい・つらい 同じ場にいる人の反応がしんどい 嫌い・いや
気遣い・感謝	職員への気遣い 職員への感謝
期待・楽しみ	家族との面会 他の利用者との繋がりへの期待
自分で待ち時間を調整する	待たない工夫 待ち時間の工夫（楽しみ・喜び）

1) カテゴリの説明

カテゴリを【 】各々のカテゴリを構成するサブカテゴリを《 》で示す。

また、逐語録から抜粋した概念を指し示す典型的な言動を「 」, 補足を（ ）内に示した。

(1) 【待つことは当然】

あらゆる場面で待たされる事を当然として受け止めている事を表すカテゴリである。利用者の背景には戦争体験や戦後の生活状況の中で培われてきた生き方（年輪）などが大きく関係していることを表わしている。

このカテゴリは4つのサブカテゴリ《順番を待つのは当たり前》《育った時代・教育の影響》《慣れた》《皆と一緒に安心》で構成される。

《順番を待つのは当たり前》：集団生活であり、自分だけが居るのではない。状況に応じて待つ事は当然で食事・排泄・入浴など日常生活において多少の待ち時間は当たり前である。早め早めに行動し待つ事は苦に

ならないということである。

「いっぱい人がいたら待つことは当たり前と思って
いる：F氏」

「施設にいるので用事もなく待ったからといって損得を言う事はない：H氏」

「秩序を乱すことはいけないことであり、規則に準じたことをやるのは当たり前だと思っている：F氏」

《育った時代・教育の影響》：利用者が育った時代は、人が集まる場所では待つ事は当然という時代であり、待たなければ配給されなかった。又そうしなければ順番が来なかった時代を生き、影響を受けてきた利用者の歴史を反映している。

「戦後の配給制度の時いつもいつも並んで待っていた。何でも順番の時代だったから：C氏」

「生活する上で和を大事にしているそういう教育を受けてきた：L氏」

「何事も反対したこともなく自分で勝手な行動もしたことは無い：F氏」

「規則を守るのは学生時代から：F氏」

《慣れた》：入所当初は待ち時間が長いことに疑問を持つ利用者もいるが、日がたつにつれ周りの状況が見えてくる。そのことにより、待たないといけないことが理解できたり、あとどのくらい待たないといけないのかが予測できたり、施設でのペースに慣れてきたことにより待ち時間が長いことにも慣れてきたことを表している。それとは逆に早めに行動することで安心し、それが習慣化してきている利用者もいることを表わしている。

「待ち時間が長いことに慣れた：N氏」

「早めに行動し待つことを自分で習慣化した、と思っている：N氏」

《皆と一緒に安心》：集団生活を送る中で自分だけ遅れるのではないか、忘れられるのではないか、という利用者の思いがあるので、多少の待ち時間はあっても皆と一緒にいることが安心であるということに重点が置かれていることを表している。

「気が落ち着き安心する：H氏」

「団体で行動することに安心感を抱く：M氏」

(2) 【待つことは仕方ない】

このカテゴリは、できることなら待ち時間は少ないほうが良いが、集団生活を送り何らかのケアをスタッフに依存している状況では、自分より介護度の高い他の利用者と自分を比べて自分は後でよいとあきらめ

ざるを得ず、むしろ「先にやってあげて」と他者をいたわる気持ちに置き換えることによって待つことに対する感情を緩和することを表わしている。このカテゴリーは3つのサブカテゴリー《諦め》《苛立ち》《他者との比較で待つことを納得》で構成される。

《諦め》：集団生活を送っている以上は待たされるのは仕方がない、自分もスタッフに待ってもらうこともあるのだからと自分を納得させたり、最初はとまどうが周りの状況を見て多少の我慢は当たり前、仕方ないと環境に順応していく力があることを表わしている。

「待つ、待たされるのは宿命：I氏」

「初めての利用の時は何故待ち時間が長いのか理解できずしんどかったが、慣れてくると周りの状況が分かってくるので楽に待つことができるようになった：L氏」

「施設の方針なら仕方がない：I氏」

《苛立ち》：待ち時間が長いことを仕方がないとあきらめるが、いらいらと苛立ちを感じながら待つことは当然の反応として気持ちを割り切っていることを表わしている。

「早くしてっていう時もあるが皆待っている：G氏」

「嫌という思いの他にないが、一番大事なトイレが情けない。早めに言うところけど順番やから辛抱せんとしょうがない：G氏」

《他者との比較で待つことを納得》：手伝って欲しいと思うときもあるが、自分からスタッフに手伝って欲しいと言うことはできない。自分もケアを受けているが自分よりもっと手のかかる人がある、ゆっくりなら自分で出来ると納得していることや、毎回の食事時、違う階にある食堂に移動するため、利用者はエレベーター前に集まり職員に見守られながら階を移動する。介助の必要な利用者也エレベーター前に集められ、集い待っている人を自分も待ちながら観察していることを表わしている。

「もっと不自由な人が優先されることは当たり前と娘に説得されて納得した：D氏」

「エレベーター前で重症の人が目立つわなあ：J氏」

「エレベーター前にあんまりぎょうさんいはったら（あまり沢山いると）みっともない…、先に対応してと思う：J氏」

「人と話すより、観察しながら待つことがある：E氏」

(3) 【不満】

このカテゴリーは、現在の状況はなんらかのケアを

受けている状態であるが、それまでは社会で自律した生活を送ってきた利用者が、集団生活を送る中で、我慢を強いられることに対する不満を表わしている。このカテゴリーは4つのサブカテゴリー《待たされ方の不満》《待っている状況への不満》《施設のシステム》《職員の態度・雰囲気に対する不満》で構成される。

《待たされ方の不満》：入浴時洗い場がいっぱいのため、バスタオルで覆ってはいるが裸で待ったり、集団でのケアは皆が集まってから開始することもあるため、何をしてもなく長い時間待つことがある。呼んだり、集めたりするのであれば待たすことなくすぐにしてほしいという気持ちを表わしている。

「裸で待つのは歳がいても恥ずかしい：L氏」

「1時間も前から声がかかり、早すぎるのではと不満を感じている：N氏」

「何をしてもまず呼んでぼけーと待たす：O氏」

「用事があるならすぐしてほしい：O氏」

《待っている状況への不満》：食堂に利用者が集まり始めるのは、食事開始時間より約1時間前からである。これはスタッフがお茶の準備や米飯の計量など、配膳の準備をしているため、生活しているフロアにスタッフが不在になるためである。待たされ方の不満とは違い、早くから食堂で待っている時間を気の合う人と同席ならよいが、あまり相性の良くない人と同席だったり、何らかの世話をしないといけない状況になったときの感情を表している。

「食堂で食事が運ばれるまでの間、（相性が良くない）同席の人と一緒に過ごすのはねえ…：D氏」

「冗談であるが男の人が食事を待つことに対し、おあずけを食っているようなものと話していた：F氏」

《施設のシステム》：毎日3回ある食事を、違う階に行かなければならない構造になっており、そのため利用者は長ければ30分以上エレベーター前で待たなければならない。どうしようもない思いながらも施設のシステムに対する不満があり、どうにかならないかと思っていることや、スタッフの少なさに不満を感じながら生活していることを表わしている。

「エレベーターの時間は何とかならんのかな：I氏」

「ここのシステムがわからず、こんだけ（40分～50分）待たなあかんのかなあと思った：L氏」

「何せ人が少ない：G氏」

「マンパワーの問題：N氏」

「トイレに連れて行くスタッフがいない：G氏」

《職員の態度・雰囲気に対する不満》：食事前，中，後の利用者とスタッフとの関わりで，声かけの仕方や態度等を通して感じる不満や雰囲気に対する不満を表わしている。

「朝起きてから食事に箸をつけるまでが約1時間それが当たり前と職員は思っているのか：I氏」

「早く片付けようとする気持ちが伝わってくる：I氏」

「食事後にゆっくり話がしたいが急かされる空気をを感じる：L氏」

「指示される通りに動けば良い，という支配的な雰囲気をを感じる：I氏」

「職員が急かしている雰囲気をを感じる：J氏」

(4) 【しんどい】

このカテゴリーは日々の生活を送る中で週2回の入浴や1日3回の食事など毎日毎日繰り返される長い待ち時間をあきらめたり，仕方がないと思いつつも，さまざまな身体的・精神的なつらさ抱えていることを表わしている。このカテゴリーは3つのサブカテゴリー《並んで待っているのはしんどい・つらい》《同じ場にいる人の反応がしんどい》《嫌い・いや》で構成される。

《並んで待っているのはしんどい・つらい》：実際並んで待つことにしんどさを感じている利用者もいるが，一緒に並んで待っている他の利用者を見ること自体にしんどさを感じている利用者もいることを表している。

「詰所の前トイレがいっぱいになり順番待ちをすることがつらい：G氏」

「エレベーター前にいっぱいいてはる（人が沢山いる）。あれ見たらしんどい：J氏」

《同じ場にいる人の反応がしんどい》：自分より手間のかかる利用者のちょっとした世話を，しなくてもいいのだが放っておくことができず自分も苦しくなったり，同じ場に居合わせた他の利用者のことを過敏に感じとり，つらくなっている状況を表わしている。

「待つ間，世話を焼きながら待つ時間はしんどい：D氏」

「同席の人が挨拶をしなかったり，肘をついて食べる事，ものをどこに置いたかわからなくなるなどを見ていたらしんどい：D氏」

《嫌い・いや》：長い時間を何もせずに待つということが，当然で仕方ないという思い以上に，嫌だということを表している。

「食堂で早く行ってボケーと，40分～50分待っているのは嫌い：L氏」

「いわれたらすぐするつもりなので早くから待つことは嫌：O氏」

「脱衣所で裸でじっと待つのは寒くて嫌い：L氏」

「早くから行って待つのは嫌い：J氏」

(5) 【気遣い・感謝】

このカテゴリーは，利用者が多く待っている周りを職員がケアを行うために走り回っている様子を毎日見たり，聞いたりする中で感じる，ケアを行うスタッフに対してのいたわりの気持ちや思いを表わしている。このカテゴリーは2つのサブカテゴリー《職員への気遣い》《職員への感謝》で構成されている。

《職員への気遣い》：集団生活を送る中で他者と自分を比較し，毎日様々なケアをするために忙しく動いているスタッフの様子を見ながら，できることはスタッフに迷惑をかけないように自分で行なわないといけないと思っていることや，他者がケアを受ける場所を提供しようと行動している利用者の様子を表わしている。

「職員は遊んでない。看護（師）さんに迷惑かけたらあかん：K氏」

「職員さんの人数は少ないのに相手は大勢，（自分のことは）自分でせなあかん：K氏」

「次の人のことを思い，早く場所を空けるようにしている：L氏」

《職員への感謝》：待ち時間はあるが，スタッフの日常でのきちんとした関わり方や対応，援助を受けていることに感謝したり，職員への気遣いを持っている事を表している。

「（エレベーター前で待っていると）職員はエレベーターの時すぐに（迎えに）上がってきてくれはる：J氏」

「エレベーターへの誘導のとき利用者に気をつけてきちんと乗せてくれる：J氏」

「職員さんは仕事に追われている。大変お世話になっているしありがたいと思う：I氏」

「看護婦さんに世話になって申し訳ないしうれい：K氏」

(6) 【期待・楽しみ】

このカテゴリーは待たされるという状況や時間を受動的に捉えながらも不満という感情だけではなく，気持ちを転換させ，満足を得ていることを表している。

る。このカテゴリーは2つのサブカテゴリー《家族との面会》《他の利用者との繋がりへの期待》で構成される。

《家族との面会》：食事・入浴のように義務的に待っているのではなく、期待や楽しみを込めながらなんとなく待っている状況も「待つ」という光景の中に含まれていることを表わしている。

「家族が来るかもしれないと約束もないのに、待ってみる。思ったとおり来てくれた時は嬉しいわ：D氏」
《他の利用者との繋がりへの期待》：集団生活を送る中で、待ち時間を利用した繋がりを目指していることを表わしている。老健という場での繋がりには深い付き合いは望んでいないが、日常生活の中で気の合う利用者同士の関係を求めていることを表している。

「馴染みの顔を見ないと心配、ちょこちょこっと喋るだけで十分なんです。別に寂しいと思ったこともないし：K氏」

「いろんな話がしたい、皆孤独でしょ：L氏」

「ちょっとおしゃべりした方が楽しい事あるんやけどなあ。ゆっくりしゃべってたらコミュニケーションになってえんやと思う：J氏」

「お風呂に行くときは部屋の人に声をかける：F氏」

(7) 【自分で待ち時間を調整する】

このカテゴリーは日々の習慣化された生活から自分はどのように過ごせば、より快適に過ごせるかを考え行動していることを表している。このカテゴリーは2つのサブカテゴリー《待たない工夫》《待ち時間の工夫（楽しみ・喜び）》で構成される。

《待たない工夫》：施設生活が長くなると経験として大勢で行動するときほど待つことが多くなることを理解するので、自分なりの工夫をしていることを表わしている。

「トイレに関しては、空いとる時に行ったら待たんでいいやろ：A氏」

「身支度の時間を逆算して準備している：K氏」

「少し遅めに行ったらエレベーターで上に行くのがスムーズで早く行ける：J氏」

「自分で時間コントロールしたら良い：L氏」

「お風呂のときは頃合いをみはからって1人で行っている、大勢で行ったら待たなあかん：J氏」

「（お風呂は）最後の部屋なので15時過ぎになる：F氏」

《待ち時間の工夫（楽しみ・喜び）》：待ち時間を利用して他者との交流をはかったり、自分の趣味を静かに

行うなど楽しみを見つけていることを表わしている。

「食堂でのおしゃべりが1つの楽しみになっている：B氏」

「食事の配膳の時間は同じテーブルの人と楽しんでいる：J氏」

「食事の時間は他者との会話も弾み楽しい時間になっている。待ち時間が知らん間に過ぎていきます：K氏」

「食事を通して他者との楽しみが段々深くなって行く。食堂が一番良い会話の場所。笑顔になれる：L氏」

「食堂で待つ間川柳をして静かにしている：F氏」

「待ち時間をひたすら過ごすのではなく、楽しみをみつけている：N氏」

IV. 考察

スタッフは様々な場面で「集い」「待つ」利用者を見ながら、「待たせている」という気持を持ち日常のケアを行っている。本研究の結果、待つことにたいして【不満】や【しんどい】という感情だけではなく【待つことは当然】や【待つことは仕方ない】のように否定的感情を持ちながらも、スタッフに対し【気遣い・感謝】をし、【自分で待ち時間を調整】しながら、【期待・楽しみ】を見つけていることが明らかになった。

1. 何らかの気兼ねや焦燥の中で「待つ」ということについて

スタッフに何らかのケアを依存している状況にある利用者は、自分よりもケアがたくさん必要な他者と自分を比較して「自分は後でよい」と気持ちを切り換えたり、一方で待っている時間が長過ぎると苛立ちを感じていることがわかった。利用者は、好むと好まざるとに関係なくケアに依存せざるを得ない現状の中で、他者と比較しながら待つということを納得したり、スタッフに不満を言わず我慢したり、諦めていることがわかった。

苛立ちを感じながら「待つ」利用者スタッフの間には、「待つ」ことに対する認識の落差があると考えられる。これらの背景には集団生活を送る中で、何らかの気兼ねを持ちながらケアに依存している現状が考えられる。ケアを提供するスタッフは「待ってもらっている」状況について、利用者が「諦めている」ということを推測することは可能である。しかし、今回の

結果にある「他の利用者と比較し、自分よりケアが重たい人を優先しないといけないのだから自分は後でよいという諦め」は予側していなかった。「ひたすら待つ、それはあたり前のことだが、ひたすら受け身である。事のなりゆきを相手に預けることである。思いの視点をちょっとでも自分の方へ引き寄せれば『待つ』は破綻する。待つ自分に哀れをかけてしまい、ひたすら待つことに耐え切れなくなるからだ」と鷲田（2006, p.57）が述べているように、ひたすら待つだけの行為の結果は、「待たされかたの不満」「待っている状況の不満」「施設のシステムに対する不満」「職員の態度・雰囲気に対する不満」「並んで待っているのはしんどい」「同じ場にいる人の反応がしんどい」「嫌い・いや」として表わされている。集団の中で日常生活を送ることが「1時間も前から声がかかり、早すぎるのではと不満を感じている」や「何をするのでもまず呼んでぼけーと待たす」「用事があるならすぐしてほしい」などの語りにみられるように「ひたすら待つという我慢を強いられること」に不満を感じていることが明らかになった。

また、「しんどい」という言葉をケア提供者は普段、身体的なだるさと捉えがちであるが、今回の結果が示している「しんどい」の意味を考えると、利用者が待たされる事は身体的に「しんどい」だけではなく、待っている人を見てしんどい、同席の人の世話をする事がしんどいなど、待っている状況のなかに精神的なしんどさを感じていることは新しい発見であった。待たされる側の精神的なしんどさを緩和する関わり方も必要なことが明らかになった。これらの「待たされ方」や「待っている状況」への不満に対しては、何らかのケアの工夫、つまり待ち時間をできるだけ短くするケアの工夫や待っている状況の改善が必要であろう。

また、毎回繰り返されるフロアの移動を必要とする食堂など「施設のシステム」（建物の構造）に対する不満は想定できていたが、スタッフの態度・雰囲気に対して、「当たり前と職員は思っているのか」「早く片付けようとする気持ちが伝わってくる」「食事はゆっくり食べたいのに急かされる」「食事後にゆっくり話がしたいが急かされる空気を感じる」など、利用者に対するスタッフの声かけの仕方や態度等を通して感じる不満は新しい発見であった。

一方、早く居室へ連れて帰ってあげよう、エレベーターに乗せてあげようと思って行なった行為が、利用

者は急かされていると認識していたことも明らかになった。今回の結果で明らかになった利用者とスタッフの認識のズレに対して、利用者の思いに沿った関わり方、声のかけ方などの配慮をしていくことが今後の課題となるであろう。

2. 「期待・楽しみ」としての「集い」「待つ」ことについて

利用者は、約束はしていないが家族が「今日は来てくれるのではないかと」半分あきらめながら、半分期待を持ってエレベーター前で待つことを【期待・楽しみ】にしていることが今回の結果から明らかになった。半分あきらめながら待っている状況で家族が面会に来てくれたという嬉しさは倍以上になるのではないかと考えられる。このことは「待つ」ということの否定的な側面だけをみるのではなく、プラスの感情に転換する資源として捉えることも可能であると思われる。毎回の食事や入浴のための膨大な待ち時間も、不満やしんどいという感情を誘発しやすいが、反面その待ち時間を使って他の利用者との交流をはかる事により待ち時間を調整し、活用している利用者もいる。それを望む利用者にとって、待ち時間がなければ利用者同士の交流を持つことが難しく、最近指摘されている施設内での高齢者のひきこもりに繋がり、孤独感を感じるのではないだろうか。利用者は生まれた時からだれかとの関係の中で生き、交流を持ちながら暮らしてきた存在である。施設においてもスタッフとの関わりはあるが、それだけでは人との交流が充分であるとは言いがたい。待ち時間に「少し話すだけでいいんです」と利用者が語っているように、同年代の気の合う人との関わりや、たとえ相性がわるい人であっても日常生活を営む上ではかかせない対人関係を保つことが必要であり、施設生活であっても大切なことであろう。利用者は他の利用者との心を交わせるつながりを期待しているのではないだろうか。ただ待っているようにみえていても高齢者同士が交流を求めて集まっているのであれば、交流出来る場所作り、関係作りをすることが生活の質の向上につながるケアになるのではないかと考える。

3. 高齢者の「待つことは当然」という認識について

日常の生活の中で待たされることについて、集団の生活では順番を待つのは当たり前という語りが多

かった事は意外な結果であった。利用者の育った時代・教育、「何でも順番の時代だったから」や「生活する上で和を大事にしている。そういう教育を受けてきた」という経験を持つ利用者は「待つということにはどこか、年輪を重ねてようやく、といったところがありそうだ」と鷺田（2006, p.195）が述べていることに重ねることができる。年齢を重ねる事で「職員は遊んでない」「看護（師）さんに迷惑かけたらあかん」などの語りにみられるように、待たされているという思いだけではなく、立場を逆転させて、高齢者特有の思いやりとやさしさで若いスタッフを見ることに繋がり、「待つことは当然」と待つことに耐える強み、すなわち「年輪」となっているのではないかと考える。

4. 要介護状態の生活のなかでのスタッフや他の利用者への「感謝・気遣い」について

「職員さんの人数は少ないのに相手は大勢、自分はせなあかん」「職員さんは仕事に追われている大変お世話になっているしありがたいと思う」や、「職員はエレベーター誘導の時利用者に気をつけてくれるきちっと乗せてくれる」などの語りにみられるように、待っている時間の中で利用者はケアをするために忙しく働いているスタッフの姿を見ており、日常での関わり方や対応・援助などをうけ、スタッフの大変さを理解していくことが感謝や気遣いとして表わされている。「高齢者が日常生活の中で依存せざるを得なくなった状態であっても、自分以外の人をいたわるという気持ちは忘れないという高齢者の特徴を表わしている」と吉本（2008, p.61）がのべているように、障害をもちながら他者をいたわるということを感謝や気遣いという形で表現できることが高齢者の強みであると思われる。ケア提供者はこの強みを生かすこと、つまり利用者の気持ちを十分に受け止めながら、それに応えるケアの質を保証していくことが求められる。

V. 結論

本研究は、介護老人保健施設で生活する利用者が様々な場面で見せる「集い・待つ」という行為に着目し、どのような意味があるのかを明らかにすることを目的とし、15名の施設利用者に対して半構成的面接を

行い、分析の結果、7つのカテゴリーが見出され、次のことが明らかになった。

施設での高齢者は、「集い・待つ」ことに対して自身が育ち生きてきた時代の価値意識を反映して【待つことは当然】【待つことは仕方ない】と思っている。その反面【不満】【しんどい】とも感じていた。一方で、ただ待つ、待たされる状況を受け入れるだけでなく、【自分の持ち時間を調整する】ために《待たない工夫》《待ち時間の工夫》をしており、その中で【期待・楽しみ】を見出している。また看護・介護職員へは《職員の態度・雰囲気に対する不満》を感じながらも、【気遣い・感謝】の気持ちも持っていることが明らかになった。この結果から高齢者を対象とする援助スタッフは、「待つ」ことに対しての【不満】や【しんどい】という反応に適切な対処をしていく一方、【待ち時間を調整する】【期待・楽しみ】を見出す、【気遣い・感謝】するなどの高齢者の持っている強みを活かすケアをより一層推進していく必要があることが示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力をいただきました施設利用高齢者の皆様に感謝致します。

本研究は、平成20年度神戸市看護大学共同研究（臨床）の助成を受けて行ったものであり、日本老年看護学会第14回学術集会において発表を行った。

文献

鷺田清一（2006）：「待つ」ということ、角川学芸出版。
吉本和樹（2008）：施設で排泄援助を受ける高齢者の体験，老年看護学，13（1）：57-64.

（受付：2009.12.1；受理：2010.1.19）